京都帝國大學法科大學

經濟論叢

第四卷　第六號

大正六年六月一日發行

論說

中壽ノ說（一）……法學博士　財部靜治
奢侈稅ノ本質及其構造……法學博士　神戸正雄
『座』ノ研究（三、完）……文學博士　三浦周行
東洋ニ於ケル古代ノ社會政策……瀧本誠一

時事問題

船腹調節策……法學博士　戸田海市
禁輸及關稅ニ依ル包圍攻擊……法學博士　神戸正雄
米國ノ勞働缺乏ト日本移民……米田庄太郎

雜錄

Utility ノ譯語ニ就イテ……法學士　文學士　小島祐馬
海上保險發展史ニ關スル一異說……法學士　小島昌太郎
山片幡桃ノ米價論……法學士　本庄榮治郎
精神的活力ト年齡……法學博士　河上肇
佛領亞弗利加植民地鐵道ノ現在及將來……山本美越乃
Ch. Booth ノ死ヲ聞キテ……法學博士　財部靜治

經濟論叢　第四卷　第六號（通卷第二十四號）　大正六年六月發行

論說

中壽ノ說（一）

財部靜治

一

一個人トシテハ百二十五歲ノ壽命ヲ理想スルモ妨ケサルヘク人生朝露ノ如シト悟ルモ儘ナリサレト父母兄弟妻子眷族ヲ擧ケテ百餘歲ノ長命ヲ保チ得ヘシト觀スル者ハナク又同族一朝ニシテ盡クソノ命ヲ絕タルヘキコトヲ豫期スル者ハナシ況シテ衆人否國民全般ノ壽命ヲ大觀セントスルニ當リソノ全員悉ク高齡ニ達スヘシトスル者ハナク又ソノ全部明朝ヲ待タスシテ死ニ絕ユヘシト信スル者ハナカルヘシ寧ロ人ハ老少樣々ナル人々ノ間ニ中年ノ人トスヘキ者ヲ有意無意識ニ觀念スルト同樣一定範圍內ノ各人ニ對シ事實賦與サルヘキ總壽數ヲ平等ニ各人ニ割宛ツル場合凡ソ幾歲タルヘキカヲ思案シテ之ヲ中壽ト觀念スヘクカクテ又確實ニ之ヲ算定スヘキ方法ヲ尋ヌルニ至ル

ト共ニ之ヲ左右スヘキ自然的及社會的諸事由ニモ想ヒ及ホシ併セテ又一小範圍ノ人々假令ハ都人、有福者、貧民、特殊職業從業者等ハ普通人ニ比シテ長命ナルヘキヤ短命ナルヘキヤヲ究ムルノ念ヲ起スヘシ、吾人ハ曩ニ御大典ニ際シ本誌上自ラ揣ラスシテ大壽ノ說ヲ試ミ兎ニ角人ニヨリ達セラレタル極壽老年トシテノ可能壽命幷ニ死亡ノ危險ニ富メル幼少期ヲ經歷シ得タル人々カ其後ノ生涯ニ於テ最モ頻繁ニ死スヘキ年齡トシテノ天壽ニ就キ說ク所アリシ儘今之ト交互補足ノ關係ニ立ツヘキ本編ヲ公ケニスルコトトセリ唯主トシテ本邦ノ事實ヲ取扱ヒシ一研究ニ非スシテ寧ロ中壽考察方法而モ亦其一端ヲ說カントスルニ過キス且又洗錬シテ未タ盡ササル點多ク殊ニカカル研究上利用セラルルコト多キ高尙數理ノ知識ハ故意ニ觸レサルコトトナセルヲ以テ寧ロ骨董知識ノ羅列トシテ識者ノ一笑ヲ値ヒスルニ過キサルヘキヤヲ知ラスト雖モ一面ニ於テハ世ノ識者ヲ以テ自ラ任シ人モ許セル人々ノ間頗ル粗雜ナル見方ニヨリ壽命ニ付大言壯語シテ憚ラス世ノ木鐸ヲ以テ任スル人々ノ間其說ヲ其儘受ケ繼キテ世ニ傳フルノ例モ存スルヤニ察シ故キヲ紹介シテモ新シク思フ人ヲ期待シ得サルニ限ラサラント思ヒシ儘旬日前一學會ニ臨ミテ本題ニツキ公演セルヲ機會トシテ拙稿ヲ寄セタルニ過キス。

二

高齡長壽ハ少數ノ例外事例ナリコノ例外事例ヲ問フコトモ壽命ノ適法觀察上素ヨリ有益ナレト

コノ觀察ニ比シ一層重要視スヘキハ民衆ノ壽命觀察ナリ蓋シ之ヲ究ムルハ統計家ノ道樂少クトモソノ閑事業トスヘキニ非スシテ寧ロ實用ニ富メハナリ。

世ニハ一人カ自己ノ過失ナキニ電車等ニ轢キ殺サレシカタメニソノ遺族カ軌道會社ヲ相手取リテ損害賠償ヲ請求セル際ソノ損害額ヲ見積ルタメソノ變死者カ右ノ事變ナカリシモノトセハ將來幾歲生キ延ヒタランカヲ鑑定スルノ必要上中壽ヲ尋ヌル場合稀ナラサルト共ニ一般ニ中壽觀念ハ人ノ生死ニ關聯シテ存立經營サルヘキ諸保險制假令ハ恩給遺族扶助料制度、終身年金制度、生命保險制等ニ於テ概算ノ立案ヲナスカタメニ必要ナリ此種ノ機關カ永遠ニ經濟界ニ稗益シ得ヘキハ自ラ支拂フヲ得ス又ハ自己ヲ破綻沒落セシムヘキ給付ヲ預シメ約セサルト共ニ夫等機關ヲ利用スル人カ之ニヨリ授ケラルヘキモノニ比シ過多ノ給付ヲナスノ必要ナキ場合ニ限ル右二要件ヲ充タシ預シメ給付反對給付ノ高ヲ見積ルカタメニハカカル機關ニ加入セル者ノ中壽ヲ確實算定スルノ土臺ニ供スヘキ逐齡漸死又ハ生殘ノ常例ヲ明カニスルノ要アリ現ニ諸國官廳ノ人口統計未タ發達セサリシ當時主トシテ各齡別死亡研究ノ發達ヲ促シタルモノハ實ニ生命保險會社否之ニ關係セル數學家タリキ是等ノ人々ニヨリ開拓サレタル研究ハ他ノ一般數學家ニヨリ純學問上ノ興味ヲ以テ迎ヘラレ又助長セラレソノ間政治家ソノ他計數ニ興味ヲ有スル者モ亦國狀判斷ノ材料トシテ之ニ注意ヲ拂フニ至レリ。[1] 現ニ又生命保險會社トシテ保險料算定ノ基礎トシテ過少ナル死亡律度ヲ選

1) Vgl. Haushofer, Lehr-und Handbuch der Statistik. 2. Aufl. 1882 S. 207; Block-Scheel, Handbuch der Statistik. 1879 S. 114

ハンカ會社ハ損失スヘク高死亡ニ過クル律度ヲ使用スルトキハ保險料ハ不當ニ高率トナリタメニ保險ノ普及ヲ妨クヘキコトハ事實ニヨリ實證セラレタリ一例ヲ擧ケンカ從前獨逸ノ多數會社ハ一八四三年ノ狀態ニヨレル英國十七生命保險會社ノ經驗ニヨレル死亡律度ヲ採算ノ土臺ニ供セルモ當時ノ英蘭ニテハ幼少齡級及中齡級ノ死亡中歐ニ比シテ尠カリショリ獨逸ノ諸保險會社ハ計算上ノ豫定數ニ超過セル死亡人員ヲ出シ大損失ヲ蒙レル結果自國ノ經驗ニ成レル死亡律度ヲ究メ計算ノ基礎トシテ之ヲ利用スルニ至レリ假令ハ有名ナル Gothaer Bank ノ如キ一八八〇年以前ニアリテハ英ノ小材料ニ基ツケルばつべーぢ表ヲ利用セルモ其後ハ同社一八二九年乃至七八年ノ經驗材料ヲ利用スルコトニ改メタリ。[2]

中壽ノ知識ハ保險機關ノタメニノミ重要ナルヘシト想フカ如キハ大誤ナリソノ計數ハ社會上ノ意義ニモ富ミ一國施政上ニモ至要ナリトハ實ニ普國官廳統計ノ創設者ほふまん及之ヲ次ケルぢーてりち研究ノ流レヲ汲ミ卓越セル死亡研究ヲモ傳ヘシ統計學大家えんげるノ名言ナリ實[3]ニ中壽ハ國民ノ活力判斷ノ一尺度ニ供シ得ヘキノミナラス國民ノ經濟開化否全開化ニ關スル狀況判斷ノ準繩トシテモ有益ナリ國民全般特ニ幼少者及中年ノ者ニツキ中壽高キハ常ニ萬民幸福ノ兆ト呼ヒ得ヘク又中壽ノ多少ヲ驗シテソノ國ニ於ケル醫術衞生政策否一般政治、學術、一般開化ハ人生ヲ脅カスヘキ死因ヲ如何ナル程度迄輕減除斥セルカノ一證ニ供シ得ヘシ人生ノ最高目的ニ盡サント

2) Vgl. Prinzing, Handbuch der medizinischen Statistik, 1906, S. 277.
3) Vgl. E. Engel, Die Sterblichkeit und die Lebenserwartung im preussischen Staate und besonders in Berlin. Zeitschrift des preuss. statist. Bureaus, Jahrg. 1861, SS. 322, 323.

欲スルモ之カタメニ重大ノ要素タルヘキハ命ナリ命ハ實ノ實ニシテ「畠あつての芋種、命あつての物種」トハ眞ニ至言ナリ人ノ一生涯中果タサルヘキ任務ハ歳ト共ニ滋殖シツツアルヲ以テ出來ル限リ民壽ノ延長ヲ計ルハ攻學經世上ノ一大目的トシテ造次モ忽カセニスヘキニ非ス Biometrica トハ近年ニ至リ英國ニ於テ人生ノ特殊研究ヲ指スヘキ學名トナリシモ夙ニ前世紀ノ中葉中壽算定ノ材料タルヘキ死亡律度ニ對シ「人生計」Biometer ノ名稱ヲ附セントシコノ指針カ人生又ハ衞生事情改良ニ關スル研究上重要ナルハ自然界ノ研究ニ於ケル晴雨計寒暖計等ノ測定器ニ異ラスト說キシハ同シク英ノ統計學大家ふあーるナリ、[4] 輓近獨逸帝國統計公刊物中弘ク普及セル帝國勞働報一九一一年度第五號ハ又一八七〇年來每十年ヲ一期トシテノ材料ニヨリ一九〇〇年迄ニ三回作製サレシ獨逸帝國民死亡律度相互ノ比較上中壽ノ遞增ヲ窺ハシムルヲ見記シテ曰ク「右死亡事情改善ニヨリ經濟上如何ニ高キ意義ヲ有スルカハ獨逸ニ於テ年々生レ來ル子二百萬人カ一八七〇年代ノ死亡事情ニヨレハ約七五百萬歳ヲ送ルニ過キサリシモノ九〇年代ノ死亡事情ニヨラハ八五百萬歳ヲ送ルヘキコトヲ思フノミニテ足レリ」ト立言[5]ノ宏壯ナルハ支那ノ古史ニ於テ兄弟各一萬八千歳ト記セルニ比スヘキモ誇張ノ跡ナキト其跡アルト誰カ両者雲泥ノ差アルヲ想ハサラン。

中壽ノ知識ハ個人ニトリテモ亦極メテ重要ナリ蓋シ思慮アル人ハ少クトモ職業ノ選擇配偶者ノ選定、一家ノ樹立、老後ニ及ヲヘキ事業ノ着手等凡テ生涯中ノ重要案ヲ立テ又ハ變更スルニ當リ

4) Cf. Newsholme, The Elements of Vital Statistics. 1899 p. 255.
5) Zit. im Grundriss der Sozialen Hygiene v. A. Fischer, 1913. S. 43.

一定ノ度迄ハ自ラ爾餘幾何ノ命數ヲ豫期シ得ヘキカヲ思案スヘケレハナリ。素ヨリ統計ノ計數ニ顧慮スルコト斯クノ如クナル以外ニ遙カニ中壽ヲ凌クカ如キ命數否最高可能壽命ニ對スル希望ヲモ亦繫キ得ヘキコトヲ妨ケス、素ヨリ子孫ノタメニ美田ヲ買フ能ハス何等ノ財產ヲモ積ムノ見込ナキ家父ニシテ愼慮ナラハ生命保險寡婦孤兒保險ニ加入スヘキ程度ニ於テ統計上ノ中壽ヲ尊重スヘキコトアルヘキモソノ以上ニ長命ヲ希ヒテ養生專一ナルハ寧ロ人情ノ自然ナリコハ又無理ニモアラス蓋シ中壽又ハ豫想餘命ナル觀念ハアル一人カ相當ノ理由ニヨリ將來一定年數ヲ生存スヘシト豫期シ得ヘキコトヲ意味セス詳言スレハ遲ク死スヘキ人々カ中壽以上ニ送ルヘキ超過年數ハ早ク死スヘキ人々ノ間ニ分配セラルルコトヲ意味スルノミナルヲ以テ中壽又ハ所謂豫想餘命ハ特定ノ一人カ多分享受スヘキ命數トハ何等ノ關係ヲ有セサレハナリ。[6]

中壽ノ實用トシテ擧ケ得ヘキモノヲ搜サハ其外尙少カラサルヘシト雖モ特ニ茲ニ注意スヘキハ「一代又ハ壽數」eine Generation oder die Dauer des Lebens ノ語ヲ用キシ[7]古統計學大家じゆーすみるひカ全人口ノ中壽（氏ハ後說死者平均年齡ヲ以テ之ニ宛テタリ）ニヨリ一代年數（Generationsdauer）ヲ發見シ得タリト信シタルコトナリ氏ハカクテ譬ヘハ絕エス流ルル出生ノ流レニ閘門ヲ設ケ中壽ヲ一期トシテ之ヲ開キ間歇的ニ多數人ヲ流シ込ムニモ似タリト觀シタルモカカル考察上一代年數ト中壽トノ間ニ何等密接ノ關係ナキコトヲ看過シタリ夫レ一代年數ノ調査ニアリテハ蕃殖分娩ニ全

6) Cf. Newsholme, op. cit. p. 301.
7) Vgl. Süssmilch, Die göttliche Ordnung, 4. Ausg. 1775. I. S. 385; II. S. 343 fg.

ク關係ナキ者從ヒテ特ニ多數夭死者ハ除外スルノ要アリ此理由ニヨルトキハ後說生存者平均年齡モ亦一代年數ノ一表章トスルニ足ラス。[8]

三

中壽ハ之カ意義ヲ知ルト知ラサルトヲ論セス普通人ニアリテモ尙觀念サルヘキハ本年分國民年鑑五二頁ニ「凡ソ三十三歲ヲ以テ平均年齡トス」ト傳フルニヨリテ察スヘシ之ヲ古來學者ノ研究ニツキテ察スルニ中壽ハ不幸ニモ種々ノ意義ヲ付シテ使用サレタル名稱ナルヲ見ルべるちよん(父)カ佛國一八四〇乃至四九年ノ材料ニヨリ中壽ノ名稱付セラレタル數學的諸表章ヲ一括表示セルモノニヨルニ左ノ如シ[9]

眞ノ中壽	Vie moyenne vraie (espérance mathématique de vie)	四〇・〇五歲
生存者平均年齡	Age moyen des recensés	三〇・九三
死者平均年齡	Age moyen des décédés (calculé sur les listes mortuaires)	三五・六六
出生一人當リ人口	Rapport de la population au nombre annuel des naissances $\frac{P}{S_0}$	三八・〇〇
死亡一人當リ人口	Rapport de la population au nombre annuel des décès $\frac{P}{D}$	四三・三〇
右兩値ノ平均	Moyenne entre les deux précédentes valeurs (form. de Price) $\frac{P}{\frac{1}{2}(S_0+D)}$	四〇・四〇
生殘表ニヨル蓋然壽命	Vie probable d' après la table de Survie	二四・三〇
死亡統計ニヨル蓋然壽命	Vie probable d' après la liste mortuaire	三三・三〇

是等諸計數ハ今日尙廣キ範圍ニ於テ壽命考察ノ目的上間々故障ナシトセラルル所ナルカ吾人ハ以下ソノ大多數ニ付各別ニ略說ヲ試ミ眞ノ中壽觀念考察ニ資スルコトトスヘシ。

8) Vgl. Mayr, Bevölkerungsstatistik, S. 415; Rümelin, Über den Begriff und die Dauer einer Generation. Reden und Aufsätze. 1875. S. 286 尙拙稿「社會統計論綱」一一七頁參照

9) Cf. J. Bertillon, Cours élémentaire de Statistique administrative. 1895, p. 508.

四

昔時ニアリテハ死亡數ヲ示スニ當リ年々死スル者一人ニ付人口幾人ニ當ルカヲ示スノ方法普通ニ行ハレソノ數ハ又普通ニ中壽ニ等シカルベシト思ハレタリ保險學又ハ數學上ノ何等目的ヲ貫カントスルコトナキ政治家又ハ學者カソノ初メ全國及總齡級ヲ通算セル死亡數及人口相互ノ比ニ興味ヲオケル所以ノモノ之ニヨリ國民ノ活力ヲ伺ヒ得ベシトセルニヨルモノナリ假令ハ甲國ノ死亡率年々人口千ニ付四〇從ヒテ人口每二五人中死亡一人ヲ示シ乙國ニテ死亡率同シク三〇從ヒテ約每三三人ニ死亡一人ヲ示セリトセンカ乙國民ノ活力ハ甲國ニ於ケルヨリ永ク且ツ其比33:25タルベシト考フルニアリ現ニ此一般比ヲ以テ活力 Vitalität ト呼ハントセル學者(Kersseboom及Guillard)アルト共ニ之ヲ中壽ト呼ベルモアリ。ソノココニ至リシ所以ノモノ一ノ停滯人口 Stationäre Bevölkerung, Stationary population (Westergaard ハ別ニ常數人口 Konstante Bevölkerung テフ適切ナル名稱ヲ用ヰ Newsholme ハ事實ノ眞相ニ照シ life-table or normal population ノ語ヲモ用ウ) 詳言スレハ人口ノ總數及年齡組合セカ年々歲々停滯不動タリ各齡ニ於ケル各減員ハ一新來者ニヨリ補ハレ死亡ト出生ト同シカルベキ場合(從ヒテ又生殘表ノ年齡組立ニ全ク符合スベシ)ヲ有意無意識ニ假定シツツ立言シタレハナリ乃チ假リニ死者カ甲ハ三ケ月乙ハ一歲丙ハ五歲丁ハ二〇歲ト言フカ如キ死ニ方ニ出テスシテ死者總員ノ經歷セル年數總計カ彼等ノ間ニ齊一ニ分配セラレ出生死亡人員年々同シカルベシトセハ一年內ノ

死亡數ニテ人口ヲ除シテ得タル結果ハ取リモ直サスソノ人口　中壽ヲ示スヘキヤ覩易キ所ナレハナリ[10]

右ノ假定ニ認ムルカ如キ停滯人口ハ從前ニアリテハ起リ得ヘキ望多カリシナランモ今ヤ生死去來ノ權衡上一般ニ人口遞增ノ勢アリ從ヒテ又之カタメニ引起サルル幼少齡級ノ遞增アリ又各齡死亡ノ割合ハ齊一ヲ續ケサルカタメニ右ノ假定ハ紊サルヘシ事實上兩國共ニ同一ノ死亡比ヲ示セル場合ニテモ甲ハ幼少齡級ノ人員ニ富ミ乙ハ成年級ノ人員ニ富メリトセンカ兩國民ノ豫想餘命ハ大ニ相違スヘシ。從ヒテ又右ノ計數ハ時ノ前後ニヨル比較研究ノタメニハ或ハ多少ノ實用アルコトアルヘキモ國別地方別ノ比較研究ニハ利用價値尠シ矢野恒太氏ハソノ著「日本人ノ生命ニ關スル研究」中本邦內地人ノ死亡率ト臺灣人ノ死亡率トヲ數年(明治三四—四一年)ニ亘リテ比較表示シ臺灣ニ於ケル死亡率高ク換言スレハ死亡一人當リ人口ハ內地ニ有利ナルヲ示サレタルモ兩人口及ソノ死亡ノ年齡別ヲ參酌セサル限リ內地ノ籀生狀態又ハ內地人ノ活力臺灣ニ比シテ勝レルコトヲ輕斷スルヲ得サルハ同書ニモ亦認ムル通リナリ[11]

サレハ諸國諸都市又ハ都鄙等ニ付死亡事情ノ比較研究ヲ精密ニ遂ケント欲セハ齡級別死亡率出來得ヘクハ逐齡死亡率ヲ比較スルノ要アリ現ニ又終身年金、生命保險等ニ於テ計算ノ基本トシテ初メヨリ必要視サレタルモノハ之ナリキ而シテ其比較研究ヲ確實ニ遂ケント欲セハ各齡死亡數ト

10) Vgl. Westergaard, Die Grundzüge der Theorie der Statistik, 1890. S. 182; Block-Scheel, a. a. O. ss. 115, 116; Newsholme, op. cit., p. 290; Mayo-Smith, Statistics and Sociology. 1907, pp. 174, 175.

11) 同書六及七頁參照

ソノ死者ヲ出セル各齡現存者數トヲ組合ハスノ要アリト雖モコノコトタル急減又ハ急增ノ勢アル人口ニアリテハ必スシモ容易ナラス從ヒテ世人ハ割合ニ散漫ナル比較研究ヲ遂ケテ甘ンシツツアリ我邦官廳統計上一般死亡率ノ算定ハ由來年內ノ死亡ヲ年末ノ人口ニ比スルノ方法ニヨリシカ其方法ハ輓近漸ク昌ンニ行ハルルコトトナリシ各齡死亡率ノ研究ニモ及ホサレ現ニ統計局ノ近刊「大正二年人口動態統計略說」三六頁ハ「大正二年ハ幸ニシテ人口靜態調査年ナルカ故ニ同年ノ十二月末日ニ於ケル本籍人ノ年齡別數アリ此ノ人口ニ對シ」「各性年齡別死亡數ヲ配シテ各年齡ノ死亡率」ヲ算定セルコトヲ明言ス此比較ヲ以テ適當ノ比較視シ兼ヌルハ以下引續キ述フル所ニヨリ明白ナルヘク惟フニ又我統計局長ハ心中ソノ比較ノ粗雜ヲ熟知セラルルニ拘ハラス所謂國勢調査事業カ徒ラニ名相ノ「成算」中ニ宿サルルノミニシテ實地ニ斷行サレス從ヒテ又比較ノ基本計數トシテ確實ナル人口年齡別數ヲ求ムルノ由ナキカタメニ心ニモナク右ノ比較ヲ遂ケラレ唯單ニ例年末ノ內務者調査人口統計ニ比シテ本籍人口年齡別ノ計數ニ伴フ誤謬幾分カ拙カルヘシトセラルルノ意味ニヨリ「幸ニシテ」ノ文字ヲ挿マラレシモノナラント信ス歐米諸國調査研究ノ實況ニ比照シ情ナキコトトハ想ヘト飜リテ又名相ノ成算モ數年ノ內ニハ文字通リニ成算ノ實ヲ擧クヘキコトアルヘシト想ヒツツ自ラ慰ム。尤モ外國ニ於テモ人口ノ絕對數トシテハ確實ナルコト我國ノ計數ニ勝ルコト數等ナルヲ利用シツツ比較研究ノ上ニテハ計算ノ便易ヲ計リ必スシモ精密ヲ期セサルノ

例ナキニ非ス乃チ間々人口實査ノ結果トシテ得ラレタル年齢別計數ヲ選ヒ之ヲ以テ人口實査期ノ中間年次ニ於ケル中人口年齢別ト假定シ各齢級死亡率ヲ算定ス一例トシテ獨逸ふらんくふると市（馬印河畔）ニ關スル一表ヲ掲ク

齢級 歳	人口一九一〇年十二月一日現在	死亡數 一九一〇年中	死亡數 一九一一年中	各齢人口千ニ付死亡一九一〇及一一年々平均
〇―一	八、四八七	一、一二七	一、一四五	一三三、九
一―五	三三、〇六一	五三五	四〇二	一四、二
五―一〇	三七、六三五	一三一	九五	三、〇
一〇―一五	三三、八三一	五九	六九	一、九
一五―二〇	四六、三七三	九九	一一八	二、三
二〇―二〇	八一、二四〇	二三三	三三〇	四、〇
三〇―四〇	七五、六二八	四四四	四八五	六、二
四〇―五〇	四七、〇一〇	四三六	四七二	九、七
五〇―六〇	二八、〇五八	六五八	五六二	二一、四
六〇―七〇	一六、四〇六	七二七	七八一	四六、〇
七〇―八〇	五、八七七	五九一	六〇二	一〇一、四
八〇以上	九五一	二九	二六	二九、二
計	四一四、三七六	五、三三〇	五、二三五	一二、八

右ノ方法ニヨリテ遂ゲタル死亡事情考察ハ年末ノ一瞬間ニ於テ一年齢ニアル者ノ一年上ノ滿年齢ニ達スル迄ニ死スルハソノ瞬間ノ前後每一年内ニ配劃サルヘキコトヲ斟酌セル點ニ於テ研究方法上一歩ヲ進メタルモノト言フヘク現ニ吾人モ亦自ラ揣ラス曾テ夫婦婚姻年齢ノ組合セヲ研究セルニ當リ同樣ナル斟酌ヲ加ヘシコトアリサレト[12]又右ノ方法ニヨリテ得タル各齢級現存者數ハ事實

12) 本誌第一卷第二號特ニ二〇〇及〇二一頁參照

同齡級ノ年平均死亡トシテソノ前後二年內ノ動態調査ニヨリ得タル計數ヲ生ミ出セル現存者ト全然一致ストナシ難キヲ以テ死亡事情ノ純白忠實ナル描寫トハナシ兼ヌ（シ。[13]

五

「日本人の平均壽命が年毎に約つて行くのは心細い事であります」「明治廿年頃は男子三十八歳女子三十九でありました」「近年は男子三十一歳女子三十二歳といふ平均になつたのです」トハ男爵高木兼寬博士カ婦人雜誌本年五月號ノ卷頭ニ警告セラルル所タリ否ソノ警告カ同博士ノ口ヨリ發セラレシトハ諸種ノ紙面ヲ通シテ傳聞スルコト屢ナリ吾人ハ今ヤ博士カ果シテ如何ナル方法ニヨリ之ヲ算定サレシカヲ探索スルノ餘暇ヲ有セサルヲ以テ輕々シク評論スルコトヲ憚ルモノナリト雖モ試ミニ博士ノ擧ケラルヽ數ヲ日吉明助氏著「貧ノ研究」中（一一六―一一七頁）ニ揭クル計數等ニ照シテ臆測スルニ其數ハ死者平均年齡（右ノ著書ニハ生活年數ノ文字ヲ用ウ）ニ相當スルカ如ク又果シテ然リトセハソノ遞降ヲ見テ輕々シク「日本人の平均壽命が年毎に約つて行く」ト觀スルノ要ナク「心細」ク感セストモ濟ムコトナラスヤト疑フ。

死者平均年齡或ハ平均死亡年齡（外國語ノ用例モ一定セス英語ニテ Average age of the dying 或ハ Average age at death 或ハ Mean ages at death 獨逸語ニテ Durchschnittsalter der Gestorbenen 或ハ Das durchschnittliche Alter beim Tode 或ハ Das durchschnittliche Sterbealter 等通シテ用ヰラル）トハ一期間內ニ死セル多數人ノ年

13) Bleicher, Statistik. 1915. ss. 119, 120.

齢ヲ合算シ其和ヲ死亡人員ニテ除シテ得タル商ナリ人或ハ誤リ想像シテ曰ク死者平均年齢ハ中壽ヲ示スヘク一民衆ノ健否壽夭ヲ計ルノ一尺度ヲ授ク諸事情長命ニ資スルモノアラハ右平均年齢ハ高カルヘク環境健康ニ害アラハ其平均ハ低カルヘシト。カク平均死亡年齢ト中壽トヲ混同スルハ今モ尚頻繁ニ繰返サル、所ナルカソノ由來スル所ハ久シ乃チ死亡律度ノ研究カ今日ノ如ク精密ナルニ至ラサリシ以前ニアリテハ人口靜態ノ調査材料備ハラス一ニ死亡ニ關スル材料ノミヲ土臺トシテ之ヲ作製セリ現ニ英ノ古キ生命保險會社 The Equitable カ一七六二年創設サレシ當時同社カ保險料算定ノ基礎ニ宛テシ Price's Northampton Table ハ停滯人口ヲ假定ニ立テ死亡年齢別計數ノミヲ材料トシテ作製サレシカ右死者平均年齢ヲ壽命ノ一驗證トシテ採用スルニ至レルモ實ハ右死亡表ノ作製ニ伴ヘル誤謬ノ一斷片ナリじゅーすみるひモ此錯誤ニ陷キレルハ前ニ一言セリ後世ニ至リテモ此弊ヲ重ネシ者ハ多ク特ニ前世紀ノ中葉伯林學士院報ニ揭クル時ノ統計局長ぢトてりち臨終ノ中壽研究ノ如キ一八一六年一八三六年一八五五年ノ三ケ年ニツキ普國ノ死者平均年齢ヲ計算シソノ數ヲ中壽ト名ツケソノ上昇ヲ見テ(乃チ三年次計算ノ結果ニヨルニ二八・五四九歳、二八・九四二歳、三〇・三〇六歳タリ)普國民ノ福祉增進ヲ斷シソノ後繼者えんげるヲシテ巧妙ノ惜辭ニヨリ「靈化セル前任者カ生前自ラ其自作ニ對シテナスノ要アリシコトヲ今代リテナササルヲ得サルニ至レルハ悲ムニ餘リアリソハ外ナラスソノ計算ニ誤アリ立言ノ基礎トナリシ論據ハ統計上ノ根據ヲ缺クト

14) Cf. Newsholme, op. cit. p. 294, 287 尙拙稿「統計學史上ノはるりー」(國民經濟雜誌第九卷第二號所載)參照

一言スルコト之ナリ」ト評セシメシアリ批判活斷ノ才ニ長ケ又該括的研究トシテノ好著Allgemeine Bevölkerungsstatistik 1859, 1861 ヲ殘セシわっぽいすモ同シクソノ弊ヲ繰返シ又殆ント前著ト其時ヲ同フシテ中壽研究ヲ發表シ其中ニモ死者平均年齡ヲ中壽ト呼ヒ眞ノ中壽ハ眞ニ國民ノ繁榮ヲ計ルノ尺度ニ供スヘキモコハ右ノ用例ト區別スルタメ活力 Vitalität ト呼フヘキコトヲ唱ヘタリ[16]わっぽいすカ右ノ弊ヲ繰返セルモ實ハ當時ノ普通用法ニ鑑ミ故意ニ之ヲナセルモノ、如ク推測セラル現ニ一八八一年ニ公刊サレシ遺著「統計學研究ノ手引」二〇三頁ニ於テ世人ハ普通ニ尙中壽觀念ヲ正解セサルコトヲ指摘シ死者平均年齡ニ中壽ヲ判斷スルノ用ナキヲ認セリ。特ニ又永年ニ亘リ此混同ニ陷キルコト最モ甚シカリシハ佛國ナリ同國ノ國狀トシテ人口增加漸次微弱ノ勢ヲ續ケシヨリ老人級ノ割合ハ漸增シ幼少年級ノ割合ハ遞減シソノ當然ノ結果トシテ死者平均年齡ヲ高カラシメタリ批評眼ナキ統計家ハタメニ誤ラレ之ヲ本トシテ普通佛人ノ壽命漸增ヲ斷セントシタリ。[17]

以上述ヘシカ如キ判斷ハ停滯人口ニアリテハ適切ナルヘキモ遞增ノ勢アル普通人口ニアリテハ右平均ヲ動カスヘキ事由ヲ一ニ國民ノ健否壽夭ニ影響スヘキ諸事情ニノミ歸スルヲ得ス其數ハ諸年齡ニ於ケル死亡數ノ多少ニヨリテモ左右サルルノミナラス自然ニ又一國又ハ一群中如何ナル年齡級割合ニ多數ナルヤニヨリ左右セラル而モ亦諸齡級ノ多寡ハ順年出生數ノ增減多少ニヨリテモ左右サルヘキ所ナリ此事タル零歲及八〇歲ニテ死セル二人ノ平均年齡モ等シク四〇歲ニテ死セル

15) Vgl. Engel, a. a. O. S. 335; Haushofer, a. a. O. S. 206 Anm.
16) Vgl, Wappäus, Über den Begriff und die Statistische Bedeutung der mittleren Lebensdauer. 1860, S. 5, 25. （內田文學博士ニ本書借覽ノ榮ヲ得タリ今之ヲ引用スルニ當リテ謝意ヲ表ス。藏書わっぽいす「普通人口統計論」ハ獨逸ニ抑留サレツヽアリ今引證シ得サルヲ惜ム）
17) Vgl, Mayr, a. a. O. S. 236.

二人ノ平均年齢モ共ニ四〇歳タルヘキヲ思ハハ容易ニ了解シ得ヘキ所ナリ假令ハ來住移民ニ富メル諸國ニテハ此階級ノ者ハ幼少期死亡ノ危險ニ打勝チテ渡來シ中年級ノ人員ヲ多カラシムヘキヲ以テ社會衞生事情ハ不良ナルニ拘ハラス其死者平均年齢計算ノ結果ハ自ラ高カルヘシ又出生數ハ經濟狀態順況ニアリ又住民ヲ通シ希望ノ精神ニ充テル際最多ナルヲ普通トスヘキモソノ結果トシテ幼少年級ノ現存者ハ多キニ至リ從ヒテ又幼少者ノ死亡數モ多カルヘクカクテ其社會事情ハ最モ良好ナルニ拘ハラス死者平均年齢ハ低カルヘシ今假リニ本邦死者平均年齢カ前引用書「貧ノ研究」一一六及一一七頁ニ示セル如ク

歳		歳	
明治二九年(一八九六)	三八・〇五	明治三九年(一九〇六)	三二・九七
同 三五年(一九〇二)	三三・一七	同 四一年(一九〇八)	三一・八四
同 三七年(一九〇四)	三四・二九	同 四三年(一九一〇)	三一・九七

タリ外觀上低下ノ勢ヲ窺ハシムレハトテ其間假リニ本邦人口統計年齢別ノ組立ニ變遷アリ特ニ幼少齢級人員ノ割合ヲ大ニ增セルカ如キ事情アリトセンカ（今姑ラク統計局ニ於テ人口靜態統計ヲ編成スルコトトナリテヨリ以後ノ計數ヲ引クコトトセンニ人口千中滿一五歳未滿者ノ割合ハ明治三十一年末三二八・三同三六年末三三四・八同四二年末三四二・二大正二年末三三九・四ニシテ大體ニ遞加ノ勢ヲ呈ス[18]年齢別組立上幼少齢級ノ占ムル割合前後同シトスルモソノ絶對數ハ我邦ノ如キ遞增人口ニアリテハ遞加スヘキニ其以上ニ右割合ノ增加ヲ示スハ重ンスルノ値アリソノ以前ノ內務省調査人口年齢別ニアリテハ幼少齢級ノ割合右三十一年末ノ計數ニ比シ一層少カラント信スヘキ理由アルモ今比較ヲ果サス）邦民ノ健

18) 「大正二年末帝國人口靜態調査ノ結果ニ據ル帝國人口概說」一一八頁及一二〇頁參照

康狀態不良トナレルノ事實ナキモ亦ソノ死者平均年齡ノ低下ヲ示シ得ヘク此低下ニヨリ中壽ノ短縮ヲ斷言スルヲ得ストハ一應推斷シ得ヘキ所ナリ。尙一例トシテ英蘭ノ事實ヲ擧ケンニ同國ニテハ一八四一年中人口四六人中一人ノ死アリ中壽四一歲ヲ示セルニ死者平均年齡ハ僅カニ二九歲タリ、其歲ト餘リ距タラサル時期ニ於テ佛蘭西及瑞典ノ中壽ハ英ニ比シテ少カリシニ拘ハラス死者平均年齡ハ英國最モ低カリキコハ實ニソノ當時ニ於ケル英國人口遞增ノ影響ト認ムヘキ所タリ。[19]

以上ノ主旨ヲ推シテ考フルトキハ死因タル諸疾病別平均死亡年齡又職業別平均死亡年齡ヲ比較研究スル場合ニ其一般罹病者又ハ一般有業者ノ年齡別同樣ナルヤ否ヤヲ吟味スルノ必要アルコトヲ察スヘシ大臣ノ如ク比較的高齡ニシテ之ニ就クヘキ官職ハ健康毀損ノ虞多シトスルモ現ニ大臣タリ又ハタリシ人ノ平均死亡年齡ハ當然高カルヘク又紡績女工タルカ如キハ事實不衞生的ナル職業ナリトスルモ之ニ就ク者普通ニ年若キ女タリ又ソノ勤續年限モ平均三年ヲ出テストセンカ其平均死亡年齡低シトスルモ單ニ此一事ヲ擧ケテ之ヲ不健康ナルノ一證左トスルヲ得ス。コハ親易キ所ノルニ拘ハラス同樣ナル輕斷ハ往々ニシテ行ハル一例トシテ緒方正淸氏譯社會的色慾論明治二二年ノ再版中本邦ニ關スル唯一ノ材料トシテ比丘尼ノ壽命ニ關スル一表ヲソノ一九頁以下ニ挿マレ僧尼總員五〇名ノ平均死亡年齡六三歲タリ是ニヨルモ其壽數俗人ニ勝ルハ明ナル事實ナリト斷セラルソノ原材料ニヨルニ入寺年齡不明ナルモノ多ク從ヒテ一般僧尼階級ノ年齡構成ヲ斟酌シテ

19) Cf. Farr, Vital statistics, 1885, p. 457.

徐ロニ斷スルノ用意ヲ缺カレシハ幾分カ恕スヘシト雖モ輕斷タルノ譏リハ免レサラン。

從前ニアリテハ死者平均年齢ノ增加ヲ指示シテ民福增進ノ徵トスルコト普通ナリショリえんげるハソノ謬妄ヲ辯セントシテソノ死亡研究ヲ遂ケシハ以上說ケル所ニヨリテモ明カナルカ氏自身カ普漏西ニツキテ遂ケタル死者平均年齢ノ研究ハ頗ル雄大ナリキはうすほーふぁーニ倣ヒ其研究ノ結果ヲ抄錄スルコトトセン[20]ニ（はうすほーふぁーノ示セル表中ニハ一計數ノ誤傳アリ）

死者平均年齢

年次	男	女	通算
一八一六—二〇	三六・四一	三六・八〇	三七・三七
一八二一—三〇	三七・一九	三九・六六	三八・三九
一八三一—四〇	三七・四一	三九・三三	三八・三四
一八四一—五〇	三六・三一	三八・一〇	三七・三三
一八五一—六〇	三五・三四	三七・六三	三六・四〇

えんげるハ尙一歲未滿ノ兒女死亡數ニ富ミ全死亡ノ平均年齢ニ影響スルコト多キノ事實ニ鑑ミ、別ニ滿一歲ヲ經歷セル人々ニツキテノミソノ平均死亡年齢ヲ算出シタリ

滿一歲以上ノ死者平均年齢

年次	男	女	通算
一八一六—二〇	三六・六五	三七・六七	三七・一四
一八二一—三〇	三八・〇一	三八・七六	三八・三七
一八三一—四〇	三六・八三	三七・六四	三七・三三
一八四一—五〇	三五・八五	三六・八九	三六・三七
一八五一—六〇	三五・一四	三六・六九	三五・九一

20) Vgl. Engel, a. a. O. S. 346 fg.

えんげるハカク平均年齡低下ノ趨勢アルヲ示シオキツツ附言シテ曰ク「本表ハ同種研究上前古ニ比ナク又何處ニテモ利用サレサルカ如キ大數ニ據レルモノナルカ其結果ノ示ス所ハ死者平均年齡ト同視サレタル中壽カ絕ユス高マリ又ハ高マレリトスル甘キ見解ニ反ス」眞理ハ寧ロ「死者平均年齡ハ中壽ト完ク同一ナルコトナシ前者ノ低下ヲ以テ無條件ニ福祉ノ減少ヲ證ストスルヲ得サル」ノ事實ニ存スト。

六

明治十二年末日甲斐國現在人別調ノ報告書四六頁ニハ中數年齡ニ關スル一表ヲ揭ケ男女通算中數年齡二七・八五歲タルヲ示セリ實ニ年內ノ死亡年齡別ニヨリテ平均年齡ヲ算出シ得ヘキカ如ク一隣間ニ於ケル人口靜態調查年齡別ノ結果ニヨリテモ亦平均年齡ヲ算定シ得ヘキハ覩易キ所右中數年齡ハ實ニコノ生存者平均年齡 Average age of the living, Das Durchschnittsalter der Lebenden ナリ同調查ノ主宰者杉亨二氏ハ當時右平均ヲ平均トシテ示サレタルノミニシテ之ニヨリ何等國情判斷ヲ下サレサリシハ賢明トスヘキモ外國ニアリテハ此數モ亦往々中壽又ハ生存蓋然數ト混同セラレタリ現存者ノ平均年齡ヲ以テ一國死亡事情ノ反映視シ得ヘキニ非スヤトハ容易ニ着想サルヘキ所現ニらむしーハ此計數ヲ以テ死亡步合及死者平均年齡ニヨル謬斷ヲ矯ムルノ餘地アルヲ認メ坊ミニ說イテ曰ク生存者平均年齡ハソノ平均豫想餘命ヲ意味セサルカ如ク一地方又ハ一國ニテ死

セル人々ノ平均命數ハソコニ生存セル人々ノ平均年齢ヲ示サスト。[21]

本計數ニヨル民力判斷モ亦誤解ニ陷キラシメ易キハ前平均ニツキ述ヘシト同一理由ニヨリ明カニシ得ヘキ所ナリ乃チ人口年齢別上極メテ多數ノ子及老人ヲ窺ハシムルモノト所謂生産年齢級ニアル者割合ニ多數ナル國ト同一平均年齢ヲ示ス場合起リ得ヘシ吾人ハ今此點ニ付詳說スル迄モナシト考フルヲ以テ單ニはうすほーふあーカ高キ平均年齢モ低キ平均年齢モ共ニ或ハ幸福タリ或ハ不幸タリトシテ想像セル諸場合ヲ附說スルニ止メンカ(1)高キ平均ヲ以テ幸福トスヘキハ之ヲ見ルニ至レル所以中年及高年ノ少死亡ニ存スル場合ニアリ不幸視スヘキハ少出生數又ハ夥多ノ幼者死亡ニ基ツク際ニアリ子供生レス或ハ生ルルモ間モナク悉ク死シ從テ人口漸滅ノ勢アル所平均ハ年々高マルヘシ(2)低キ平均ヲ幸福トスヘキハソノ原因幼少者ノ少死亡ニ存スル場合又ハソノ國ノ經濟事情人口增加ヲ有利トセル際ニアリテハ大出生數ヲ原因トシテコノ低平均ヲ生メル場合ニアリ之ニ反シ中年高年ノ多死ニ基ツクモノハ不幸ナリ。[22]

茲ニ尙注意スヘキハ生存者平均年齢ヲ以テ民衆ノ若者級及壯老年級ヲ分ツノ一簡易數視セル學者アルコトナリ此區別其モノモ世人ノ感興ヲ惹クヘキ區別トハナシ兼ヌルノミナラス生存者平均年齢ニヨリテ之ヲ分ツモ皮相的ナリ寧ロソノ目的コリセハ折半年齢 Median Age, Halbierungsalter ニヨル方便利ナルヘシソハ年齢順ニ排列サレタル全人口カ恰モ二等分セラレ幼若ナル半部ト長老

21) Cf. Rumsey, Essays and Papers on some Fallacies of Statistics. 1875, p. 211.
22) Vgl. Haushofer, a. a. O. S. 202.
23) Vgl. Rümelin (H. v. Scheel), Bevölkerungslehre. Schönberg, Handbuch der politischen Oekonomie. 4. Aufl. 1. 1896, S. 835.

ナル半部トヲ両斷スヘキ年齡ニヨリテ定マルモ諸人口比較研究ノ目的ヨリセハ粗大ノ譏リハ免カレ兼ヌヘシ。

七

一數ニヨリ民衆ノ健否、壽夭ニ關スル一指針ヲ收メント欲セハ眞ノ中壽 The mean duration of life, Die mittlere Lebensdauer 又ハ豫想餘命 Expection of Life, Lebenserwartung ニヨルヲ最モ適切ナリトス中壽トハ一定年齡ニアル多數人カ將來尙並ラシテ生キ永ラウヘキ年數ヲ指スコハ死亡表ニヨリ直接算定シ得ヘク又之ニヨリ算定スヘキモノナリ乃チ初生兒又ハ零歲ヲ以テ出發セル者千中幾何カ一歲二歲三歲ノ滿齡ヲ超エテ尙生殘スヘキカヲ示セル漸死律度ヲ土臺トシ是等千人カ全體トシテ凡テ幾歲ヲ送レルカヲ直接ニ知リ此數ヲ千人ニテ除スルトキハ各人ニ並ラシテ分賦サルヘキ壽數ヲ得ヘシ右ノ例ニテハ初生兒ヨリ出發シタリト雖モ同シ計算法ハ何レノ齡級ヨリ出發スル際ニテモ之ヲ應用シ得ヘク從ヒテ又中壽ハ各齡ニ付之ヲ算定シ得ヘシサレト比較研究上普通ニ利用セラルルハ初生兒ノ中壽ナルヲ以テ狹義ノ中壽ト呼フ場合之ノミヲ指スコトトナシ得ヘシソノ後ニ於ケル各齡中壽ニツキ注意スヘキハ前記ノ如キ算法ニヨリ得タル平均ヲ直チニ中壽ト呼フ以外ニ過去ニ經歷セル年數ヲ之ニ加ヘ其和ヲ以テ中壽トナスコトアリ假令ハ三〇歲ナル男ノ豫想餘命三二・五二歲ナリトセンカ之ニ過去ノ經歷年數ヲ加ヘタルモノ 30+32.52=62.52 ヲ眞ノ中壽 The true mean duration of life ナリトスルカ如キ之ナリ[24]ヨハ各齡ノ豫想餘命其モノヲ以テ中壽トナ

24) Cf. Newsholme, op. cit. p. 298

スノ普通用例ニ反スト雖モ相當ノ理由アルコトナレハ英語ニテハ混同ノ弊ヲ避クルカタメニ夙ニ未來中壽 Mean After-life time ノ語ヲ使用シ獨逸ニテモ又近年ニ至リ同樣 Fernere mittlere Lebensdauer ノ文字ヲ用ウル者アルニ至レリ。[25]

八

中壽算定ノ方法ヲ詳說スルニ先チ注意スヘキハ各齡中壽カ簡單ニ初生兒ノ中壽ヲ土臺トシテ算定サレ難キコトナリ換言スレハ滿一歲者滿二歲者等ノ中壽ハ簡單ニ初生兒ノ中壽ヨリ一又ハ二歲ヲ引去リタル結果ニ等シトナシ兼ヌルコトナリ一般ニ一滿年齡ニ於ケル中壽 a ナリトスルモ一歲上ノ滿年齡ニテハ a-1 ニ等シカラス寧ロ一層高キヲ常トス。

此コトタル容易ニ說明シ得ヘキ所ナリ假令ハ一國ニ於ケル初生兒ノ中壽四一歲ニ等シト言フ場合何ヲ意味スルカヲ考フルニ千人ノ初生兒カ其出生ヨリ死滅ニ至ル迄合計四一千歲生存スヘシト言フコトナリ今一年經過ノ後是等四一千歲中幾歲消光サレタルカヲ考フルニ其極限千歲タルハ明カナリ換言スレハ右ノ一年內ニ初生兒一人モ死セサリシコトヲ假定スル場合ニ然リサレハ若シ其一年內ニ若干ノ人假令ハ n カ死セリトセハ實際右人員ニヨリ暮サレタル年月數ハ是等 n 丈ケノ人々カソノ一年內ニ暮シ盡スコト能ハサリシ年月延ヘ數ヲ千歲ヨリ差引ケル結果ニ等シカルヘク從ヒテ又滿一歲ノ時ニ生殘セル人々カ爾後送ルヘキ餘命ハ四萬歲ヨリ多カルヘシ今又假リニ右初生兒中ノ一人モ一歲經歷中ニ死セス寧ロ其最終瞬間ニ若干ノ死者ヲ出シ從ヒテ事實上千年ヲ暮シ盡

25) Vgl. Bleicher, a. a. O. S. 121.

シ四萬年ノ總餘命ヲ殘スノミナリトスルモ其時滿一歲ナル者ノ中壽ハ初生兒ノ中壽ニ比シ滿一歲丈ケ少シトスルヲ得ス蓋シ今ヤ四萬歲ヲ千人ニ分タス右最終瞬間ニ死セル人員丈ケ減セラレタル人員ニ分配スルコトトナルヘク其商ハ何レノ場合ニモ41—1乃チ四〇歲ヨリ多カルヘキヲ以テナリn+1歲者ノ中壽ヲ以テn歲者ノ中壽ヨリ滿一歲丈ケ少カルヘシトスヘキハ滿n年齡ニ達セル者カ其後ノ一歲經歷中途中ニテモ最終瞬間ニテモ一人ノ死者ヲ出ササリシ時ニ限レリ又一年齡級ノ死亡カ次ノ年齡級ニ於ケル死亡ニ比シ多キニ從ヒ此危險ナル年齡經過後ニ於ケル中壽ノ短縮程度ハ愈々少カルヘシ一年齡級ニ於ケル死亡甚タ多ク其分母減少ノ程度カ其分子換言スレハ將來尙送ルヘキ餘命總年數短縮ノ度合ヨリ强シトセハ中壽ハ減スルコトナクシテ寧ロ增加スヘシコノコトタル實例トシテ恰モ滿一歲ノ前後ニツキ見ル所ナリ。

明治三一年末及三六年末帝國人口靜態調査生年別統計表及三二乃至三六年中帝國人口動態調査生年別死亡統計表ヲ基礎トシテ作成サレタル矢野氏日本國民新死亡表（同書六六頁參照）ニヨルニ初生男ノ中壽ハ四三・九七歲ナリ（一六頁參照）從ヒテ千人ノ初生男カ享受スヘキ總壽數ハ四三、九七〇歲ナリ然ルニ初生男每千中滿一歲ニ達スヘキハ八四三人ナリ（同書第九表參照）今是等八四三人ノタメニ幾何ノ餘命アルカヲ見ルニ今先ツ滿一歲未滿ニシテ死セル人員1000—843乃チ一五七人ノ事實上送リシ總年月ヲ問フコトトシ乳兒死亡ノ大部分ハ出生後ノ初期ニ歸スルノ事實ヲ酌酌シ假リニ之ヲ右人員ノ四分ノ一ニ相當スルモノ（ふいるくすモ此假定ヲ立テタリ）[26]ト推定センカ

26) Vgl. Fircks, Bevölkerungslehre u. Bevölkerungspolitik. 1898, S. 175.

$$43{,}970-\left(843+\frac{157}{4}=\right)43{,}098$$

ハ右滿一歳者八四三人ノ享受スヘキ餘命總數タルヘシ今此總年數ノ分配ニ預ル者ハ最早千人タラスシテ八四三人ナルヲ以テ 43,098 : 843 ノ算式ニヨラハ其商トシテ得ラルヘキ五一・二二歳ハ滿一歳者ノ未來中壽タルヘシ換言スレハ生後一年内ニ於ケル死亡ノ大危險ヲ免レ得タル各男子ニツキテハ其一年内ニ死セル者甚タ多カリシ結果トシテ今ヤ死亡ノ危險ニ犯サルルコトモ減セルタメ其豫想餘命ハ恰モ五一・二二歳タリ初生男ノ中壽四三・九七歳ニ對シ少クトモ七・一五歳丈ケ高マレルヲ見ル。(矢野氏ハ滿一歳者ノ中壽ヲ五一・二一歳トシテ示サル少差アルハ計算手續相違ノ結果ナリ)

然ルニ世ニハ輕卒ニ ロナニ 歳ノ中壽ハ n 歳ノ中壽ヨリ單純ニ一歳ヲ引去レルモノナリトスルカ如キ考察ニ甘ンスル者アリ啻ニ新聞雜誌記者中ニ其弊アルノミナラス本邦ニ廣ク行ハレ本邦統計ノタメニ大功績アリシはうすほーふあーノ統計學中同一ノ謬斷ヲ發見スルコソ奇怪ナレ乃チ氏ハ叫ヘリ「吾人ノ壽命ハ是等生涯中ニ吾人カ成シ遂クヘキ事業ニ照シ餘リニ短キコトトナレリ開化セル歐洲人ハ今ヤ既ニ學フコトノミニ其初生涯中ノ二五年ヲ費スヲ以テ(初生兒ノ)中壽四〇歳トシテ學問アル人カ人類ノ用ニ盡スカタメニ餘ス所ハ一五歳アルノミナリ」[27]ト此一節ハ氏カ一九〇四年ノ著書人口論中ニハ流石ニ除カレタリト雖モ右ノ論法ヲ更ニ推シ進メナハ三九歳ノ者ニハ餘命一歳ノミタリ四〇歳以上ハ年々歳々負數ノ歳ヲ積ミ行クノミト妄語スヘキコトトナラン。

(次號完結)

27) Vgl. Haushofer, a. a. O. S. 208.